

秋月の歴史

中世秋月氏の時代

秋月氏とは？

秋月氏の祖は、平安時代に大宰府を中心として勢力を誇った大蔵氏です。源平争乱の時、当主大蔵種直は平家政権に属して壇ノ浦の戦いで敗れます。その後、種直の子種雄は、鎌倉幕府から赦免されて建仁3年(1203)秋月庄を賜ったといわれています。種雄は移り住んだ秋月を名字として、以後秋月氏を称するようになります。

鎌倉時代の秋月氏

鎌倉時代の文献に秋月氏が登場するのは、中国の蒙古軍が二度来襲した元寇の時です。この時の様子を描いた「蒙古襲来絵詞こはなばね」には、秋月九郎種宗なる人物が小舟の先頭に乗って蒙古軍と戦っています。種宗は系図に載っていないことからいかなる人物か不明ですが、当時の当主種家やその弟という説もあります。

南北朝～室町時代の秋月氏

元弘3年(1333)足利尊氏、新田義貞、楠木正成らの活躍によって鎌倉幕府は滅びます。この後、後醍醐天皇の親政が始まると、足利尊氏はこれに反旗をひるがえして京都に攻め上ります。しかし敗れて九州へ落ち延びてくると、九州では肥後の菊池武敏を中心とする天皇方がこれを迎え討ちます。秋月氏は天皇方として多々良ヶ浜(福岡市東区)で戦いますが、敗れて一族郎党皆討死にしたといわれています。

菊池武光が大刀を洗ったことで知られる正平14年(1359)の大保原の戦いでは、秋月氏は幕府方として菊池軍と戦いましたが、敗れて以後天皇方として活躍しています。

明德3年(1392)、金閣寺で有名な北朝三代将军足利義満の時、南北朝の統一がなされます。九州には中国地方の大内氏が進出し、秋月氏などを傘下に治めて、筑前の少貳氏や豊後の大友氏らと戦うようになります。

戦国時代の秋月氏

秋月氏は、室町時代の中頃から筑前国守護となった大内氏と密接な関係となり、その庇護のもと着々と地盤である夜須・上座・下座の三郡から、近隣地へ勢力を伸ばしていきます。

しかし、天文20年(1551)大内義隆が家臣の陶晴賢の謀反により自刃すると、後ろ盾がなくなった秋月種方も、弘治3年(1557)大友氏の大軍に攻められて古処山城①で敗死してしまいます。この時文種の子種実すえは、中国地方の毛利氏を頼み秋月を脱出しています。種実はこの翌々年には秋月に復帰したともいわれていますが、自他共に認める再興がなされるのは、永禄10年(1567)の「休松の戦い」の勝利からといえるでしょう。

一時勢力を誇った大友氏も、天正6年(1578)の「耳川の戦い」で薩摩の島津氏に敗北すると、衰退の一途をたどります。この時いち早く挙兵した種実すえは、筑前・筑後・豊前地域まで勢力を広げます。一方、島津氏は佐賀の龍造寺氏をも破り、九州統一の機運が高まります。秋月氏は、北上する島津氏と同盟を結び地盤の強化を図ります。

天正15年(1587)秀吉の九州征伐の際、種実すえは重臣恵利内蔵助暢亮⑨を偽りの使者として派遣します。この時、内蔵助は秀吉軍の強大さから勝機の無いことを悟り、種実へ自身の切腹による諫言を行います。種実すえは聞き入れず徹底抗戦を決断します。しかし、搦城であった岩石城が一日で落城すると、負けを悟って名器の茶入れ「檜柴肩衝かたつき」を献上して降参します。

この後秀吉は戦後処理として、秋月に日向高鍋へ移るよう命じます。その時々的情勢をみて戦乱を生き残ってきた秋月氏も、初代種雄から十七代約四百年に及ぶ秋月での活躍は終焉を迎えます。

近世黒田氏の時代

江戸時代初期の秋月黒田藩

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、恩賞として筑前国を黒田長政に与えます。長政は新たに「福岡」という城下町を形成して、福岡藩の初代藩主となり、秋月には長政の叔父黒田直之が一万石を与えられて移り住みました。元和9年(1623)、長政の遺言により二代藩主忠之は、弟長興に秋月周辺の五万石を分け与えて支藩秋月藩が誕生します。

江戸時代中期の秋月黒田藩

安永3年(1774)七代藩主となった長堅は、天明4年(1784)将軍に拝謁せずに没してしまいます。藩ではこのことを隠し、裏工作を進めながら翌年、日向高鍋藩主秋月種頼の次男幸三郎を跡継ぎとします。これが秋月藩中興の名君といわれる八代藩主長舒です。長舒は福岡本藩の代わりに長崎警護を勤めるようになり、この時の縁で長崎の石工を招いています。文化7年(1810)に完成した石橋は、最初「長崎橋」と呼ばれましたが、後に「目鏡橋」⑧と呼ばれるようになります。

八代長舒・九代長韶の時代は文化、文政期にあたり、世は華やかなるときではありませんでしたが、長舒は叔父米沢藩主上杉鷹山(秋月家から養子)の治世を模範として、文武では藩校「稽古館」、産業では養蚕・木蠟・和紙・葛・川苔などの奨励策を積極的に取り入れました。

- 藩校「稽古館」
- 亀井南冥に学んだ原古処⑩を教授とし、兵学・馬術・槍術・砲術・柔術などの講義が行われていました。古処の門下生には、勤王の志士、海賀宮門や戸原卯橋などがいます。
- 緒方春朔

秋月藩の藩医で、ジェンナーより六年早く種痘の方法を創始した人物として知られています。寛延元年(1748)久留米に生まれ、63才の文化7年(1810)に没しました。春朔は、長崎で学んでいた頃から痘瘡に関心を持ち、寛政2年(1790)には種痘法を初めて人体で行ったといわれています。

江戸時代後期の秋月黒田藩

十代藩主長元の時代は天保の大飢饉がおり、藩の財政も窮乏して、本藩の援助を受けながら再建の道を歩まねばなりませんでした。このようななか、長元も長舒・長韶同様に文武を奨励し、島原の役二百年祭での「島原陣図屏風」③や、「秋月藩封内図」の製作などをおこなっています。またこの時期も歌人の原采蘋や、絵師の斎藤秋圃など傑出した人物を数多く輩出しています。

幕末の動乱と秋月黒田藩

江戸城桜田門外で大老井伊直弼が暗殺された万延元年(1860)、秋月藩では長義が十一代藩主となります。このよう状況のなか慶応4年(1868)、上級藩士馬廻組の子弟でつくる「干城隊」が設立されると、干城隊は藩政改革として白井亘理、中島衡平を暗殺します。明治13年(1880)白井亘理の子六郎は父の仇として、東京上等裁判所判事一瀬直久(旧名山本克巳)を討ち果たします。この事件は日本最後の仇討ちとして、当時広く世間に報道されました。

明治維新と秋月

明治2年(1869)の版籍奉還の後、長徳は秋月藩知事となりますが、同4年の廃藩置県の際に免職されます。約二百七十年に及ぶ秋月支配はここに幕を閉じます。

明治9年(1876)、士族による熊本神風連の乱が起けると、秋月でも宮崎車之助、今村百八郎、戸波半九郎③・⑦らを中心とする秋月党が決起します。秋月党は豊津まで攻めのぼりますが、乃木希典ら小倉鎮台兵に敗れてしまいます。そして宮崎ら首謀者は自刃して乱は鎮圧されました。西南戦争の約4ヶ月前のことでした。

